

22年度福生市立学校評価書総括表

福生市立福生第一中学校	学校自己評価総括	改善策	学校関係者評価総括	改善策	総括評価
	<p><b>学校自己評価総括</b></p> <p>(1)特別支援教育の推進※本校特別支援学級の名称は8組            ①②8組全生徒の通常級副席をクラス表で明示し机も用意したことで、生徒相互の意識啓発が図られ、結果9名が4部活動に、7名が学年行事に、2名が意見発表会に、1名が授業(国、社、理)に継続参加している。            ③7割の教員が8組での授業を経験。内1名(家庭科)は週1回8組の授業に定例参加している。            CEセンターを講師とした全体研修を1回、学年ごと生徒の実態に即した実践研修を2回実施。結果コーディネータ及び特別支援委員会の有効性が高まり、7名を教育相談に繋げ、通級(2名)及び8組(1名)で適切な学習の場を確保した。            以上8組生徒の副席や学年行事の参加及び教員の交流実践から、特別支援学級と通常級の壁は低くなり推進への道が保障された。今後、全教員の手法向上と生徒同士の相互交流の在り方、8組の教育課程の充実が課題である。</p> <p>(2)小学校との連携推進「中一プロブレム」の解消と9年間を見通した視点から            本校主任の主導による小中教務主任会が実施(3回)された。結果、今年度はスプリングスクール、出前授業(2小学校で実現)、研究授業、三校交流会で計画的実践的な教員交流が行われ、また児童と生徒の相互交流についても中学校見学、小中合唱交流、職場体験が計画的に実施された。生活指導においても情報共有が徹底し始め、保護者に対する共同指導(2名)や合同ケース会議が実現(4回)した。これまでの連携の成果として、「中一プロブレム」解消についても現6年生に対しては入学前のプレテストと「春休み中のしおり」(日誌と国語・算数のワーク)の実施という形で試行することができている。以上、校長、教務主任、生活指導主任の日常的な情報交換及び協働が可能な流れになりつつあるが、2小学校と同レベルでの連携の推進、検証できる継続的な取り組みの実施、出向いた教員の後補充、実施時期の調整が課題である。</p> <p>(3)基礎的基本的学習内容の定着  <b>各教科に関わる取組</b>            ①標準授業時数の3%増は確保したが、教科の授業時数に偏りがあり適時適性化を図る必要がある。            ②学期1回の教科研究授業を実施。生徒席に座り、生徒の視点から協議し研修の活性はあったが、生徒アンケートで、特に数学・英語は4割近い生徒が理解できていないと回答しており、更なる工夫と共に生徒個々の実情に即し、一斉授業とは別に手立てをとる必要がある。            ③教科ごとの研修を通して、適正な評価の在り方と学校としての一貫性の必要に対する認識を徹底できた。この成果を次年度シラバスとして示し、評価を指導に繋げる取り組みとして具体化する。</p>	<p><b>改善策</b></p> <p>(1)特別支援教育の推進            ・生徒同士の有効な交流の在り方として、少数対多数の構図を崩した形での実施を図り、「相互」の認識を育成する。そのため次年度は、班ごとの昼食交流、通常級生徒の8組授業参加、チーム編成による地域活動を計画実施する。            ・コーディネーターを中心に専門機関との連携を強化し、特別支援委員会の機能を情報交換・共有からケース検討と方策提案に高める。そのため次年度は、特に西多摩保健所及びあき野学園との連携強化を図ると共に、「本校特別支援教育の在り方」を校内研修の課題とする。</p> <p>(2)小学校との連携推進「中一プロブレム」の解消と9年間を見通した視点から            ・「進路」を担う中学校側の視点から連携を進める傾向が強くなり、本部ロックにおいても中学校主導になりがちである。この点を改め、小中の相違を明確にし、「9年間」の連続性を小中の立場から考え連携する必要がある。そのため次年度は、学習・生活両側面から中学校の持つノウハウを小学校支援に生かす視点を重視した連携の具体化を図る。併せて、昨年度からの単発の取り組みを小中で評価・検討し、その継続発展を図る。            ・生活、学習両面で支援を必要とする生徒及び家庭への支援について合同ケース会議を実施し、小中協同で指導、支援を進める。</p> <p>(3)基礎的基本的学習内容の定着            ・教科会を定例化し、授業進度を定期的に確認すると共に生徒による授業評価をもとにした授業改善をタイムリーに進める。            ・各教科で年間授業計画をシラバスとして生徒保護者に示し、評価と指導の有効を図る。            ・各学年の学習面での課題を明確にし、学年主導で意図的な「宿題」の取り組みを行う。            ・昨年度から実施している朝学習、少人数補習、習熟度別補習、教え合い学習、個別取り出し学習等の取り組みを進路学習部の下に一本化し、学校として検証した上で全体の取り組みとして推進する。</p>	<p><b>学校関係者評価総括</b></p> <p>4. 学校関係者評価の総括  <b>(1)福生一中の高く評価できる点・今後も持続、発展させて欲しい点</b>            ①生徒について            ・行事に団結し、一生懸命取り組んでいる。            ・部活動でがんばっている。            ・挨拶をする生徒が多い。            ・元気が良い。            ・服装に乱れが少ない。            ②教員について            ・色々な面で先生方がとても熱心である。            ・問題が起こったらすぐに対応してくれる。            ・何か起こった時の対応が早い。            ・生徒の様子を隠すことなく保護者に伝えてくれるので信頼できる。            ③施設、設備について            ・校庭が広い。            ・校庭に緑が多く、季節の移り変わりがよく分かる。            ・校内がきれい            ④地域との連携について</p> <p><b>(2)福生一中の改善してほしい点</b>            ①生徒について            ・部活以外の生徒のあいさつができていない。            ・数人ルールを守らない生徒がいるのが残念。            ②授業(学習)について            ・勉強がよく分かっていない生徒が多い。放課後補習の機会を設けてほしい。            ・家庭学習の習慣化が必要。            ・一部の生徒の乱れのために、授業を止めることが多い。            ③教員について            ・指導が厳しすぎる。            ・問題のある生徒に時間を</p>	<p><b>改善策</b></p> <p>5. 学校関係者評価に対する改善策            ①生徒について            ・生徒会主導のあいさつ運動が定着し始めている。教員の意識的な指導と平行し引き続き進めていく。            ・問題行動を繰り返す数人の固定した生徒については、関係機関との連携の下で改善策を図っている。            ②授業(学習)について            ・補習学習や個別指導等の学習支援については、主導を進路学習部に一本化することで、そのノウハウと教材の有効性を図り、生徒一人一人に確実な支援体制を図る。            ・学年主導で宿題の調整を図ると共に家庭学習と教材を授業に取り入れる。            ③教員について            ・指導に対して信頼を欠くことがないように指導方針について丁寧な説明を行う。            ④その他            ・PTA常任委員会や学年委員会を中心に場面や課題に即したタイムリーな依頼をした</p>	<p><b>総括評価</b></p> <p>6. 総括的な学校評価            本校は、この間厳しい指導の継続と多様な授業展開を核にした取組みによって、漸く生徒集団の落ち着きと全学年での正常な授業態勢を取り戻している。学級活動や委員会活動を通して生徒の自助努力も育ちつつある。今後学力の取り戻しと自律活動の活性化を軸にした、学ぶ集団の育成が本校の課題であるとする。しかし、本校は、文科省及び東京都の調査結果からも、学習意欲が極めて低く学力、生活規範共に中学校の一斉授業に耐え得ない生徒が3分の1近くに上るという実情が見られる。しかも、そうした生徒個々を丁寧に拾い上げていくと特別支援教育の対象であるというケースが極めて多い。その実態は通常級授業の努力の範囲を超えたものであり、改善に向けては、学校体制の取り組みとともに市の確実な支援の整備が必須である。一方、教員個々は、日々生徒と向き合い時間を厭わず熱心に指導に取り組んでいる。しかし教員集団の力量としては、本校4年以下の教員が12名と50%を越え、内新規採用</p>

<p>④英語科・国語・数学・理科で宿題に取り組み、その提出率から意識の高まりは見られた。しかし家庭学習についての生徒アンケートでは「毎日1時間以上」の回答が36%であり、「毎日はない」「全くしない」を合わせた回答が51%もあることから、恒常的な家庭学習に繋がってはいない。今後、学年主導による意識的な取り組みと調整が必要である。</p> <p><b>組織的な学習支援の取組</b>  段階的な計算、漢字、英単語の反復学習「積塵成山」を毎朝(10分間)全学年で実施し定着したことにより、その達成度の実態から低学力層が特定された。組織的な対応として放課後の少人数補習(国数英3教科を一週間のローテーションで実施)を中心に長期休業中の習熟度別補習、終学活前教え合い学習(10分間)、個別取り出し学習を継続的に実施した。結果、学習に対する前向きな気持ちや授業での集中は改善したが学力向上には至っていない。今後個々の実情に即し特別支援の視点を持った組織的な手立てが必要である。</p> <p><b>(4)自己実現を目指す教育活動の活性</b>  生徒会運営による「生徒会朝礼」を月1回定例化し、各委員会の1ヶ月間の目標・取り組み・反省を全生徒に明確にすることで、生徒会役員・各委員長を中心に意識が啓発され、リーダー層として育ちつつある。また職場体験や地域行事への参加を保障したことで、参加意欲の高まりが見られ外部からも高い評価を得た。部活動においては、目標と手段を明確にした取り組みによる活性化が必要</p> <p><b>(5)集団の一員としての規範意識及び自律意識の育成</b>  生活指導主任の権限を明確にし、合議制に拠っていた生活指導部の企画や学年に拠っていた指導判断の方向を生活指導主任の下に一本化した。結果、授業態度・服装に的を絞った一斉指導と委員会活動の連動が可能となり、効果を上げた。毎朝の教員による昇降口出迎えと連動した生徒会主導の挨拶運動もその成果の一つである。生徒アンケートにおいてもプラス項目で「服装をきちんとしている」は84%、「乱暴な行動や言葉に気をつけている」は68%、「授業中私語や居眠りをしたことはない」は60%をあげ、共に昨年度を10%近く上回っている。集団から離れ問題行動を繰り返す生徒に対しては、福祉や特別支援の側面からの支援指導の充実が課題である。</p>	<p>・学習のつまずきに対する特別支援教育の視点からの見直しと適切な支援方法の推進を図る。</p> <p><b>(4)自己実現を目指す教育活動の活性</b>  ・小集団のリーダー育成と段階的な目標の設定を軸に行事や委員会、部活動等において、生徒が達成感を持てる活動を意図的、計画的に実施する。  ・自己実現の多様な場面を確保するために、都や市の主催す様々な行事に積極的な参加</p> <p><b>(5)集団の一員としての規範意識及び自律意識の育成</b>  ・的を絞った一斉指導と生徒委員会活動を連動させ、生徒の自助能力の育成を図る。  ・集団から離れ問題行動を繰り返す生徒に対して、福祉や特別支援の側面からの支援指導の充実を図る。</p>	<p>かけることはよく分かりますが、そうでない生徒にも声をかけてほしい。</p> <p>④施設  ・トイレをきれいに改修してほしい。</p> <p>⑤その他。  ・保護者が積極的に協力しないといけません。  全面的に協力して行きたいと思えます。  ・昼休みが短く昼食の時間が少ない。ゆっくり食べさせてほしい。</p>	<p>教員6名という状況下、改善に向けては、学習・生活両面において困難がある。そのため次年度は、課題に即した実践的な校内研修の実施と併せ、市と連携した組織的な学習・生活支援体制の構築に努力したい。</p>
---	--	--	--